

24歳 母の勧めで写真館の職に就く
26歳 撮影助手となるため転職
30歳 報道写真家となる
51歳 脳出血で倒れる

vol. 19

土門 拳

▶▶ Domon Ken

夢をあきらめ、 全く興味のなかった世界で 見つけた心の糧

カメラが発明されて200年足らず、スマートフォンの普及で誰でも気軽に写真が撮れるようになり、撮影の目的は多様化した。とは言え、写真がもつ「多くの人の心を動かす可能性」は今も昔も変わらない。昭和の日本で、鋭い観察眼を持ちリアリズムを追求した写真家があった。

▶▶ 貧しい中、画家を志した学生時代

土門拳は1909年(明治42年)、かつて北前船の寄港地として栄えた山形県酒田で生まれた。父は生活のため北海道へ出稼ぎに行っていたが、土門が4歳の頃、母も看護師としてあとを追った。両親に代わり面倒をみてくれた祖父母は、貧しいながらも唯一の孫である彼を可愛がってくれた。

6歳の時、両親の上京に伴って新しい生活が始まる。環境になじむのに苦労はあったが、小学校では学業優秀な上、絵画も書道も得意だった。進学先の旧制中学でも成績は首席で、級長を務めた。面接で将来の希望を尋ねられた際には、本気で「画家になりたいです」と答えた。しかし、父が病気がちで失業した家計では、学費を払うこともままならない。退学を申し出たところ、土門の絵の才能を高く評価していた先生たちの尽力により、学費免除で学校を続けられることになった。3年生の時には、県の美術展に出品した油絵が一等に入選している。

卒業後は、通信省の倉庫で雑用係として働いた。その合間を縫って絵を描き続けた。ある日、週刊誌で目にした一枚の絵に衝撃を受ける。と同時に、自分の才能では到底辿り着けないと考え、画家の道を断念する。雑用係の仕事も辞めた後は、弁護士事務所や農民組合で働いたり、三味線奏者の内弟子になったり、職を転々とした。昭和初期の政情不安の下、留置場に入れられたこともあった。夢をあきらめ、将来の目標を失った土門の頭の中を、“自殺、の二文字が頭をよぎったこともあった。



1909年、山形県酒田出身、昭和を代表する写真家。リアリズムに徹したありのままを撮るスタイルで『古寺巡礼』『筑豊のこどもたち』『ヒロシマ』『室生寺』など数多くの作品を残している。

▶▶▶ 脳出血に倒れても、なお

24歳の時、母の勧めで写真館の職に就く。それまで写真には縁も興味も全くなかったが、他に当てもなく、やむを得ずの選択だった。住み込みの仕事は雑用が多く、写真に携わる機会は少なかったが、熱心に働いた。そのかわら数百冊ある書庫の本を片っ端から読み漁り、写真の歴史や理論を独学で学び、伯父に借りたカメラで撮影の練習をした。写真漬けの毎日を送るうちに、「営業写真ではなく、報道写真を撮りたい!」という思いが芽生えた。

そんな折、カメラ雑誌で撮影助手の求人を見つける。「この貴重なチャンス、逃したら一生後悔する」と土門は写真館を飛び出し、撮影助手となった。今度は自ら選んだ道だった。師匠は厳しく、叱られてばかり。それでも必至に食らいつき、腕を磨いた。着実に力をつけ、撮影した写真はアメリカの有名なグラフ雑誌にも採用された。

30歳になった年は忙しかった。報道写真家として転職した。職場恋愛で結婚した。仕事で訪れた寺の仏像に魅せられ、以後、古寺と仏像の撮影はライフワークとなった。30代~40代は、当時人気絶頂だった文楽、その仕事を機に興味を抱いた工芸品、著名な作家や政治家など人物、下町の子どもたちと、レンズを向ける対象は広がっていく。真実を映し出す土門の写真は、多くの人々の心を捉えた。カメラ雑誌の審査員となり、次々と写真集を出し、執筆をし、個展を開きと、多忙な日々を送った。

無理が祟ったのか、51歳の時、軽い脳出血で倒れる。麻痺が残ったが、撮影は続けた。59歳、再び脳出血で入院。車イス生活となっても、唯一動く左手を使って撮影を続けた。70歳の時、脳血栓で倒れ、意識不明となる。その後、意識が戻らぬまま80歳でこの世を去ったが、彼が残した多くの作品は、今もなお、人々に語りかけている。

(執筆/ライター 篠田 りょうこ)